八代集抄

於逢雑春妹

十九

特別
イ4
3163
104(19)

雑春　春乃遊様只
まだ歌すもの無き歌
是よりわかれ出し
部乃次に夜歌も
あるを雑部に入る
の歌出つれまし
もゝのこゝし
春くれとゝいふこゝろハ
心消するそ
あらたしき年とハ
是も鶯遊様な
新古對していう
あらたしき年ハ家の宮雑
年ハ改れとも鶯ハ
同しねよかりする

拾遺和歌集巻第十六

雑春

題しらす　凡河内躬恒

春くれとおもふこゝろハうれしくて
いまひとゝせ乃おいそくはゝる

よみ人しらす

あらたしき年ハくれともいたつらに
わか身のみさらふりまさりけれ
あらたしき年にハあれとも鶯の
ふるねにかへりそなきゝさわくなる

貴
14
3163
1 104(19)

見ゆるなるべし
年月乃ゆくへもしらぬ
鄙人ハこよみを見ぬ山家乃
瀧ハ氷をとぢてもおとせぬに
しくれとおとらせて瀧
の音するにそ春を知
るらんとや瀧の氷とし
春くれハ瀧のしらいと
此屏風の絵に貫之集ニ
七十瀧のかたかける所
アリてかけるハ流れ落る
花見えあるハなさひ
こしろに抱へてうち
歌の心ハ春来て水の
（本解）解て瀧のなかれを

小宮屏風に　右近

年月乃ゆくへもしらぬ山かつハ
たきの音にや春をしるらん

延喜十五年秋院屏風哥

紀貫之

春くれハ瀧乃しらいといかなれや（家集ハ）
むすへとも猶あわにみゆらん（家集ハくらん）

正月に人々まうできたりける
に又乃日乃あしたに右衛門督公任
翁たちのもとにつかはしける

遊ぬも泪となりてく
おもさるをいひかけ
かくはるを聞く歳
しく見るるや
あかさり君か匂ひ乃
きみの条乃名残
なさけに心に明
こちふかハにほひを
寧府におはさん
とてのかんき也
種その梅に詠給
惜まむ名残言
御館に残侍りや
梅花ちらわさきに
よく見て

中務卿具平親王

あかさりし君か匂ひ乃恋しさに
梅乃花をそけさハおりつる

流されける時家乃梅
花を見て（侍りて）

贈太政大臣（菅家御事也）

こちふかハにほひおこせよ梅花
あるしなしとて春を忘るな

亭子院乃屏風に

よみ人しらす

梅花はるよりさきに咲しかと

雪とふりし梅かゝる雪
中に埋れてさゝへもま
まさしくは見えねと見え
えたる梅の気を見たれ
安倍廣庭　右大臣御
主人の子官位を見へく
いにしとしねこしてうへし
僻案抄云ねこしてう
へハほりうへる由
とそいふめる
一
花乃いろハあかすみる
ともかくれも基俊
俊國抄云ゝはまれをと
云るましと今ハなのみ
同婦くよむへりとも

みるひともなかりけり雪乃ふるまはく

さい志らす　中納言安倍廣庭

いにしとしねこしてうへしわかやとの（万葉こそて）

わかき乃梅ハはなさきにけり

天暦御時（袖中女房の侍ひし　袋秘抄　為房）大はん所乃まへに鶯乃す

をこうはい乃枝につけゝるを

見るをとて（イたてたる）　一條攝政

花乃いろハあかすみるとも鶯乃

ねくら乃枝に手なふれそも

おなし御時梅花のさかりに御いる（？）

いふそてさせ　侍子し天
子乃遊宴をなむるを
花あはせ花盛に遊宴すると
何り花を賞する也
源寛信　左京大夫　式部
卿敦実親王子
おりて見るかひもあるハ
九重ハ禁中をいふ禁
中に匂ひまさりし梅
ハおりてこそかひあれと也
かさしてハ志らかにまかふ
白髪ハぬきて捨るを
梅乃花なれハいつれ
をぬかんと
清和乃七のみこ　四品貞辰

志もそさせて花あはせさせ給ふ

に殿上乃をのこともうたつかうまつ

りけるに　源寛信朝臣（ヒロノフ）

おりて見るかひもあるかな梅乃花

けふこゝのへのにほひまさりて

内裏乃御極給へるとき

参議伊衡

かさしてハ志らかにまかふうめ乃花

いまハいつれをぬかんとすらん

清和乃七のみこ六十賀の屏風に

観平し女安御佳珠子
貫之集云右大将保六
十賀清和乃七宮の御
息所つかうまつりけ
る時よみける此集ニ
テハ此集の詞を可用
かすめれとおぼつかなさを
我ハかへてもおぼろなん
る梅こそ山人の絵
のせきまきの絵を
よまさるとも去ぬと
どうこにけむさハかれ
年ごとに花は咲れと
あらぬき音やせんとよし
円融院御時　順集云

はるゆき

かすめれとおぼつかなきそわかやれ
梅こそ春乃かすを志るらめ
さい志らす　読人志らすそ
とこゝよほきさふかれと梅乃花
あそれあるかそうせすすそとる

円融院御時三尺御屏風十二
帖の中に　源志たかふ
梅乃枝をかりそめておる人のあると
のへ乃かすみそへたてかくすへし

天元二年十月縁宮達
なる御屏風哥ニ春
野わたりする梅花さ
けるに鶯をすへてゆ
く人とある
梅か枝をかりてはそれわ
鶯はきてし鶯をまた
てとゞゆきて可は
梅を折人の絹せん
よそ霞の帳とさ
春まそら人もとひ
来まさて花枝とよ人
よハ花こそ見えれと
おぼつかなくもかれなお
鞍馬を闇さよ隠て

小白河乃山あら花乃咲かりて
咲て待るを見ぬ人こまつてしき
しらるれは　右衛門督公任
春きてそ人もとひける山さとハ
花こそやとのあるしなりけれ
鞍馬寺（太中大史伊勢人建立延暦十五年）
くらまゝりまうて侍るおりよ
みちをしらすてまとひ侍る
安法ゝ師（内匠頭適子）
おぼつかなくらまの山乃みちしらて
かすみのうちよまとふけふかな

此うたは霞の中より
まよひて詠じ霞の
やまことそとにゆけ
然らはゆく人あり
ありてよむ心なり
すさまじくゆゑに花
さまよふやうに立
かくさる霞を言
ことの葉に味あれ
里の海辺(?)に探(?)に
も何の所の心を
はし
山里に思ひて女をかれ
まて 家をは人目と
いひて山里に帰(?)りけるや

延喜十五年斎院屏風に霞をよみて
山ちかく入人おほき　きのつらゆき
おりたちてゆかてころもはけさかたに
いろさへしけくもちるかすみかな
小一條乃おほいまうちきみの家に（清慎公）
侍けるに　よしのふ
こゝ乃海にかすみのうちにこえはるかに
こゑのみゆかしやよふらん
山里に思ひて女をかれてまかりて
侍る里のよそに待る

おもふはいつぞてやみなん
恋の心は言ふもありの
枕ことなりけりの
しらぬ人もあらんと
わりなく思ひ中すれは
人の物いひてきえて
何程の人を得てて
きくて人のもとにて男
のとはさりし
おもの物し萩の焼原
いはるは来しまゝこゝと
萩に添てさけりし
此のみちも野には人
物いふとももなきこと
なきのゝとおもはすなとし

よみ人しらず
おほかたはいまくやみなんなるかすみ
やまちもちりこそちりもこそまけ
人の物いひてきてとはさりける
男のもとに　中宮内侍
かすか野乃おほかれやけにゆくさるとも
みくねさかなをおもはするかな
女乃もとにまかれ萩のさかりに侍
けるに　藤原長能
雪をうすみ垣ねにつめるかけまちに

雪をうすし垣ねは
序并し切う萩六帖
てう集に序せらるゝ
ところより書出しと
こゝに引きかへさるゝ
りきとハ削除られ
しきと云題の集
神楽并にうつさそ
すなをにある同題
これよりも松をもひん
東三条院乃所さかま
こうする并に松もひゆめ
読せハ神なりも
りひさしとて常に初
春をうへくさるへし

ありさいわく乃かりきさ君か那し

東三条院（詮子 安融ノ后兼家公女 一条院母 世院と號し）御四十九日乃中に子日
（長保三年十二月薨）
いてさせかくるにまへの君もいひける
人乃こゝろはかりける

右衛門督公任

これよりも松もひくらんひとの
そのねのひあさきくもしもなる事

子日

恵慶法師

ひきてくる子日乃松ハいくたひも
いろくこそえれるちよのはるなん

兼盛花鳥余情の師に
さいハひとこそ月七
日子日よけすれハ
きゝそてはまきそて
人とこれを此説で
よきの子成ねると
ひきてる子日の松
わかきにかきうし論
きめてきちよせの松ハ
只きめてきくしそ并の
作者もきそてゑらよれ
さゆきにかふひらんと
ひととせ松のちよせ
秋風（拾遺）や（イツキ）み本に属（ツヘ）て
きのよふかゝるわまき（集ねのひ）

題しらす　まつんきくもて
きみこうちよせの春ハまちうてんめ
松をてまへあうらひくへき

一条院子日　よしのふ

ひとふしの松乃ちよせもひさしきに
いつまてかひやうおもひやるらん

小野宮清慎公子　左大将實資下らかりける時（右中将といひし中元輔集ニアリ）
子日しつるに

清原元輔（元輔集 ねのひにこそ まつやとし）

きのよりかゝるみゆきハあらましや
こてまき出すれまきりとりてや

元輔集云安和二年正
月五日故中將実資朝
臣のもとのおとこ子
日まいり侍りけるにを
侍りける世にかはるね
のひには実資又乃
命まそおほせ侍し
きの世には松の上るも
みゆきは源雪しぬ
叩し家集子日にと何
るは紀よく叶ふるや
松のかひく人乃六なり
袖乃緑（ミドリ）は六位乃袍の
色し松の子日まて
引る人もなんそ我
六位の袖のゆかりは叙

（正月五日人々の位を叙せらるゝ事也女叙位八日）
正月叙位乃比ある所に人々ま
かりあひて子日乃遊よかの人々と（江次第ニ見ヲ）
いひ侍りけるに六位に侍りける時
大中臣能宣
松あらはひく人々にはあやかるらし
袖乃色ありけりかひなかりける
（正月十一日外官を任せらるゝ事也 江次第ニアリ）
除目乃江子日にあたりて侍り
ころ按察（アゼチノカウ井）更衣乃はしめに（著て）
松をたのしく枝を出さく
侍るまに　とよけ

位をもまれて誰か人
ゆるすへくもよらの
述懐し緑は松の縁し
ひく人もなくてやかる
世には除目にはさ
ありしをゆてよむにひ
喜ぶる此時に五位を
の誰とつかはする
人もなき今宮をとなう
にしく宮吉野の原
山の松のひきつくるも
うきによるてよかり
ひく人もなりとも
とられたしつるとへや
ゆまそ失せよ初子て
歌人氏ア二子ひの

ひく人もなくてやみぬるみよしのの
松はねのひをよそにこそきけ
寛和二年春宮蔵人にありて（頃集云五月と有り）（六位蔵人也）
月乃うちに民部丞になりて（式部丞をも二有丞とて）
てかうふりひとつうひをのこく　右近
（叙爵すへきこの程なし）
命婦のもとよりはからいける
左さみよ
ひく人もありとおもひしはつさらり
いまうらきつきさてろや忘れそ
能宣へす　よみ人しらす

悲ひを忘すへても
誰かさそふらんよ
しさこひよ帝なれと
まうさるゝとも
ちりしときおもへらう
桃乃咲時見ても
おそれておもへ
が行おはするやらん
ちれハ何く云ふ也
山さとの家居ハかすみ
家ハ霞のこめたれと
垣根の柳の末ハ見お
よ見えれ出てみゆると
かくて
ほのかなるらく　右注

ちりしときおもへはみしかきのも
ちれとおもしおりひもありぬる
帥（太宰帥乃作ある歌こと）乃子さんこうらさよりも世俗り
くるま　弓削（ユゲノ）嘉言（ヨシトキ）
山さと乃家居ハかすみこめたれと
かきねのやなきすゑハとも見ゆ
意ハくまりくるまはほのかなるらく
ありくゆる女房乃野へ行も
くるまを見えてはわきすまそとひ
あれハところなるなといく

まのゝはさこらおも
野老を求め深て
求むるとおもハ二人孫
するを見出すると
とりわれてるも我れて
わんとの空と只ての色
春乃野よおもくられと
世よかせき八面（六）狭きし
世を帰る空は帰 二人
孫を帰る故さえの前
世はさ人のよめの孫云
居まき野あもつとし
かきくし雪もふつらん
花ぬ後ての心し深
まろせを花のなきまよ

又れを　聖範法師　比叡山
あるのかりとこそらもいふる八
ゆるかぬそのかみでまかやまきみ
みし　よみ人志らすも
春乃野ありあるく見れとあかなわ
世りところせき人乃とふらんハ
といきてもと
かきくらし雪もふりなんさくら花
まさ咲かぬまもよそへてもみん
まろせを花のなきまよに咲えてね

花咲て風ふけはちるへく
もまた咲ぬまに咲
思ふまに風ふきてぞ
よ梅花ひらきてみえと
さくらん物とおもふよ
とても咲花ちる（ヨミカタ）ハ
てちかく待せて待り
のこるゆへにて咲て
まさきに見てよりと
の心しまさに違しさ
りぬるまよ子て惜の意し
也このころの此花の
初めより心さしてる
おもけりとに此花
のなきてうけれんとし

咲きそめてをしひらきてかへるへく（すくるあり）
みつね

さかん物とおもひにさくら花
おもけりのみそさき見ゆへん
よみ人しらす

いつとみるこのころ花さかん
心のうちにねたきされ
延喜御時月次御屏風の哥
みつね

ゆくすゑにみわやまもとのそてを見え

さくら花わかやとのの
あまき物ハいつもまき
ろうし桜のようにそ
あまて我宿のを
何ハそおもはぬる
くともりとにまつ
まちきとうるへし
ころもにかりし甚
心ハなし
みつね　御厨子所ハ
朝飯及朝夕御膳を候
する所と別當預所ノ
衆あり　捻衆と云
荒人所　別當ハ蔵人頭
頭　預　出納　小舎人

あきさかのくさにおもひそさそはれし
さくら乃はさく待たる所よころ（花のち）
ともに待たる人のちれまかりる
待るまての花をおもひて待りそ
しるる
よみ人しらす
とろともおかしきのみこひして
ひとり見まうき花さかりかな
みつね（延喜御時のあれひさしかきより）
乃おもしろき桜の花をつかりけ（花人所）
是八
壬生忠見

校書殿ニ出 拾遺三ニ出
もろともにされハ おれハ
我花入かへもえさら
きれハ花の枝つかあら
てに只皆いやるよまえ
かひりとの見花人を
うしやけよめるなるし
御導師浄蔵 三善清
行（カ）息子（ラウゲン）の名僧にて
元亨釋書ニ出 延喜帝
佛名會に浄蔵師勅に
て梵唄（ボンバイ）をうたハせ
のりまく御導師と
なりや
かすみ行山のあなされ

もろともに鐘打ねハさく花
おもひやまくや寺をくらさん
ある人乃まよつりける

御導師浄蔵

かすみ行山乃あなされさそひける
おもひやりてや春をくらむ
さいまつると ほうゆき

ちかき乃花もみるてまゝの
さもらや我もしられまし

春花山乃亭子（寛平ゝ）法皇おりまして

心明し此詞ニ有口訣
とかくみの花も見るて
貫之集三ニ新院屏風
の歌し詞云ニ人の木の
もとに休まて侍つる
よ桜の花見てまるを
此歌のさ面の寺の心ハ
花方のながれを
此川を亘るりとえん
さと白浪の八立隔る
つくさのん枕詞
ますしといふしも
法皇是遷御を我か
まてといふにも
とかり
鶯のなきつる声

ちりぬれハ 僧正遍昭（花已ニ落るを）
よそにのみこそ花山よ
ちりともあらん乃れもなる

従一位褒子 本院左大臣時平女
京極御息所

かりとの見のりにまよって経
くるとききの山乃ちよくる寺（大和ある也）
さくら乃ま見よ

藤原忠房朝臣 是則子
鶯乃なきつるまへよむすの
くふ乃みゆきを寺ところえんれ

法皇是遷御を我か
まてといふにも
しれ乃ちれハ寺とくまてとちく色もる

亭子ハ故号と云鶯の此寺も花を見る

とし法師を導く也
かるさまに作くと俗
奈良ハ旧都なれ共
八とよめり何て桜
の事に作ると俗に
近法無の法同に
りやて其序と之
まかりとよみられ
霞の野につよ立る
とひうけて候まの
都人の多さを語り
此二首も忠房の屏也
世の中よりきおきて
心得し

かるさまにちくとわひつる桜さへ
ことしはきりはへてねつうちる
まかりけりられのへにまかれつわ
みちくも見ゆるやさひとかる

圓融院御時三尺御屏風に花の本
に人あまたゐたる所
かねもり

世の中はうきふしおほくありとても
花をくすてこころありけり

清輔公家にて池のほとりの桜

さくら花庭にちる歌
志つめる人とハ世に衰へ
下にそて作る花盛
時也庭のおもの歌を
紋流める花まさし
思ふひとさへ人衰に
てかけもつとく
上総より　姫藤紅家より
のなれるとあへし
源雅光　権律師　猶弁子
治安元年七十九卒
あすからの野路の雪間
見るまへしひよ　菅芳
をぐ都の花を採
くえるにあらへし

花を誘ふる　ちりとすけ

さくら花庭にちるけりおもひみて
しつめる人の花をと思へて

上総より分けて待る此源雅光
り家まくく人とさけきりへける
はゐてゆり　藤原長能

あすからの野路の雪のをあさて
待されみや花をおみたる（私上と切り）

清輔公乃家にさしあひまに灯の
とはよ桜の花をわてさえ待

ひのもとにさくる桜
灯火のもとを日本に
かけてひのもとは
こし他国（ヒトクニ）と云唐国を
とりなすへし
みやま木乃中にて云家
深山桜の名所の中より
咲花ハ深山木の云家
云家なとへ出る花をて
おれる雪かと見ゆるとぞ
ごんぐら 金鼓 和名は
ひらねとよめり 枕双紙
に鳴ひゞきて細やなる
声のきこえてこんく打
ことなりと見えたり江家

たるをよみ侍る
萬歳才 字まろ
ひのもとにさける桜乃花なれと
人乃心もおもしとそふ

山桜を見侍て 平まさむね 云様
みやま木乃中にまゝらは雲もゆるまて
きえせぬ雪と見えもするかな

ごんぐら打侍る時烟（けぶり）焼侍るを
見て読侍る 藤原ち能
くもりなき空やかのとりのみゆる

に當書金鼓を打けりとそ
かさ山よそこやの山と
なの見ゆるハ桜の見ゆる
と古風なりとさハ明し
石山乃堂の前 聖武帝
乃御時朗弁僧正建立
丈六土佛二臂（ヒヂ）如意輪觀音
うろめさいつそ出らん
おりぬきの匂ひと風を
待たく香てゆかまの
心をとらるゝかとし
敦慶（アツヨシ）式部其の一話
宇多天皇之子号玉文官
伊勢かうまり 中務ある
かりきたる付るへし

みやまさくらしよきさくらにやけ
石山乃まつのまへに侍る桜乃
木にかきつけ侍る

よみ人しらす
うろめさいひて出らんやまさくら
おりねまわひをとゝせりまうせく

敦慶（アツヨシ）式部乃子とのむすめ伊勢か
ちゝに侍るゝちりきこゆ侍るに
かめよさしける花をとるとて
はしゆき

ひさしかれあだにちるなと
瓶を飾りおきて万
代も保るやうにとおもひされど
やがて散りし可惜を
興のさむる也此哥は
撰者のよみなり
とのもりのとものみやつこ
主殿寮伴（トモ）氏（ウヂ）の造（ミヤツコ）也
清掃与儀ハ二伴作法
也ところ殿ハ禁庭の掃
除その役をもする
落花を心ありてさらん
るを惜める也
さくら花みかさの山乃
三笠山を笠の縁にいひ

ひさしかれあだにちるなとさくら花
かめにさせれどうつろひにけり
延喜御時南殿（紫宸殿也）にちりつみて侍り
ける花を見て　源公忠朝臣
とのもりのとものみやつこ心あらば
この春ばかりあさぎよめすな
題しらず　よみ人しらず
さくら花みかさの山のかげしあれば
雪とふれどもぬれじとぞおもふ
年ごとに春のながめはせしかども

雪とふるともぬれ
じとなり
年ごとに春のながめは
詠をも心もとなくて
身さへふるとは詠
小町が我身世にふる
ながめせしまにと同
じことを春の花にも
蓴を縄に深て縄え
うかあるを知られと
ぬなわて縁とくし
さる世のならふべし
同三月も閏ハ風も常
よりゆるやかなる也八重
山吹も花びらを重ね
たると

身さへふるともおもほえざりけり
志さうふ
さくらちる春ハこれとも池乃ま
ねかるぬるくしらてそうるる
三月にうるふ月ありける年やへ山
吹を読侍りける　菅原輔昭（スケアキ）　三位文時子
さるかせハのとけかりけりやへやまも
かさねくへやまふきみれる
屏風乃ゑに花のなかにひとゐ
しひとしかゝちを細にむすへりや

ちる人ハ咲すかさなるほとよ
鹿ハ花に捌れる掲られ
ハ角人ハ鹿を網に張ゐ
ゆゑに浪のむちを見る
ひくらんと也
やまかれハ川のせゝに
貫之集に躑躅と題云
おちまさるやまさとハ魚の事
第の枝れハ川の紫
浪のむちさへ彦流るゝ
方へはいらせ給ひ　ちの擣
桜をとゞめて塒あの
おくるをを花をとさ
山すみを　ぜうがひけ

あみ乃ちるをもとめくひくらん

延喜御時屏風に

つらゆき

やまかれハ川のせゝにくかとまさう
浪乃花さくおちまさりける

亭子院京極乃御息所にわたらせ
たまひて弓法験しかけ給ひて
させ給ひけるに花をこき
いれて梢をこかして山すけ
を営むすひすくかくれき

これハ葉よそ学の
うちを紛くはな
を待ちてくにさそ
とかり
このまよりちりくる花
梓弓ハやハとゝめぬ
といへ花をえやハとく
めぬハえとゞめぬかとぞ
思ふらしと言ふ義
心を春の形見にとて
めかりとどめよを
好こと也殊勝と
いふやる
まちすきてちりぬるを
よそからハ見るぞ

くせうかくる　一条乃君子貞平のむすめ

このまよりちりくる花をあつさゆみ
えやハとゝめぬ春乃かたみに

ひえ乃山よりすみ侍りける法人のもとに
梅をこひにつかはしけれハ侍りけるに
にすゝを梅の花よしちるまちか
のこりて侍る枝ハはけくつら
ましける

如覚法師（九条師輔子　元高光左近在）

まちすきてちりぬるを梅も
よそからハ見えてゐるのこれる

わかとふ宿を香をとめ
まうてくる人の葉かり
に梅花をゆひ侍れは
あるし
忠輔卿云紀ともり
本云寛弘元年十月
以後不出仕二年七月
廿一日上表辞中納言
勅許叙従二位即日
出仕ス
ふの名をとりやそて
営と云傳よ此く
殊にきせたと猿の之
又まれとるゝえ
卯月一日さかしく侍り

忠輔卿にて侍りける時卯月
一日のひはりしける
左大臣　道長公（長徳二年左大臣　長和五年摂政）
ふの戸をとりやそてつる鶯れ
声りりをせくきもとめる
返し
公任朝臣
ゆきかへる春をしもこそ花さかね
みやまかくれ乃ひとひとの音
四月朔日よみ侍りける
よしのすけ

りそる薬師をすゝむ
能居よく善乃
事るそしもそきて
す際も隠れの営る
是ハ寄信て下京と
善ハ何郭公ける
卯月一日それハ道を
何又郭公もまく
これハなけを思ひ
郭公と詠る心を云
郭とハ開もうしき
心あり高くま満き
松風乃みん聞わ
風ハ波の路を行
それハ松の萩とも

まハ何しをまゝつらきぬむかし
おもひわすれこそなりける
延長四年九月廿八日清涼殿六十（寛平七）
賀宴極御息所乃清ふまつりけ
る屏風乃哥よみける
清ゆき
松風乃ふんかたわちらつきくく
さゆてくるもとさくる萩波
延喜乃御時萩壺乃萩の花宴
せさせ給へるに殿上のおのこ共

あはせて読る也
ふちの花宮の内には
宮の中ハ禁中也
まさしく紫雲とよそへ
て只うちねの心し奉
公これ中の上にいふる
藤いて陪星りとおや
まされたる山林也
右大臣むすめ中宮
彰子道長公女一条院
后長保二年二月廿五
日中宮上東門院是也
むらさきの雲とそ
史記ニ高祖本記ニ曰呂后
曰季ガ所ノ居ル上ニ常ニ有リ雲

哥つかうまつりける　皇太后宮権大進国章

ふちの花宮のうちにはむらさきの
雲かとのみそあやまたれける

右大臣むすめの中宮のれう（料）に
てうし（調）侍りける屏風に

右衛門督公任

むらさきの雲とそみゆる藤の花
いかなるやとのしるしなるらん

読人しらすと

氣故ニ従ヒ往テ常ニ得タリ季ヲこ
漢ノ高祖おりし雲ハ
常に天子の氣ありて
呂后たつねゆきうち
心をそへていかなる雲氣と
まよはんとこ八雲
御抄ニ后の異名を
紫の雲とあり
むらさきの雲とされハ
松の緑のうち藤の
花まつはりかゝる
郭公かくふかきねの
扉まほしたる山邊
卯の花のさかる
卯花の白きを早

むらさきの色にてれは藤のはな
松のみとりもうつろひにけり

題しらす　ひとまろ

郭公かよふかきねの卯の花の
うきことあれや君かきまさぬ

屏風のうた　貫之

卯の花のさける垣ねに宿りせし
ねぬにあけぬとおとろかれけり

みちのくにまかりてのち
郭公のこゑをきゝて

此所にも葺かれて
いねられハさゝる
垣ねにハやどりしを
そをてく今山かくれの
實方朝臣傳集に
とされて後拾遺に
てうせのかけ舞も
狩衣きて遊池の趣
そのかく幸境にて
謡に謌（ウタ）へりさらく
此つきやを請かなや
こそそしらくとふるも
さくひねをさとの
みすもおこたらハ
袖もぬれたりかねる

實方朝臣

そをてく今山かくれのほとゝきす
きくひともなきねをのこうらく

女乃まらに向きていとをさうふの（昌蒲し）
ねかしく（サネむし）らる面をこせてがり
てあそれあることしをある男
乃ひとをこせ侍りけれハ

よみ人志らす

こゝろそてあくとふも郭公
まとハぬれしそねまかりけり

あやく系を昌蒲の
根にうされハまことの
ねまうね心をうつか
かくそうかかりとあやや
かわりよ我鶴と云り
さうハ郭公の齒くも
あかくつきり狗も猶る
鷹にも鳴ける例とし
ありゝの山郭公里別
山家の郭公も今里
別らく出されたり
名あるもの と
かるさと乃あやの暑
奈良志岳大和なり
郭公に云侍りけり

廉義公家陪子なり

ことすけ

かくそうかゝりとしてえや郭公
ことゝまつくをもなきわたるなる

郭公ても

大中臣輔親

あひまみやまかりしきす雲ゐなく
きうれときゝりなのかすしも

坂上郎女かりはりける

大伴像（カタを）見人

かるさとのまし乃ひとゝまに郭公

しかる方へ出さるなら
みらく粗万葉八ニ八廿哥
大伴ノ田村大孃与妹坂上ノ
大孃ニ歌一首とありて
言告遣之何如告寸
八ヤとあり

ことはくやましきいふはつけきや

蛍をよみ侍りける

健守法師

声しすりもゆるをけはされ八
草れかふことり露をきたる

声しすりもゆる蛍
蛍と詠めし草露
のかくると垂るる
話の草え草れ蛍
乃併もわかりく衣
なるさ由緒情ある
哥なるへし
どこ乃の花をしこれ八
花を遅うつく

延長七年十月十四日ことよしれ
みこ乃四十賀し侍りけるときの
屏風に
法しゆき
ことちり乃花をしこれ八打はて
するる月日みかすも志られそ

そる月日もかけりね
ぬるをるへし
一條摂政乃北方
謙徳公の北方ハ三品
代明親王乃御姫
贈皇后宮懐子謙徳
公乃御むすめ冷泉
院の女御花山院乃
母后

一條摂政乃北方わかうに侍るころ
女御と申しける時
贈皇后宮懐子

志りさふけりかれぬときハなを
うきされぬるをてし乃ちる
雛しす　みほね

志りさふけりかれね
很母君の御かりけれ
おもりたるれの小径
をたまよ隠れねて蹟の

いつもよ堰山ねてやおもかきの
もり乃したくあるまちをふりねと

いよう(よ)せねてし
抽経ぬ摂子れ志りて大なまのかきに
大荒木森ハ山城也　右と大あらきの森のした草

老いぬれは駒もすさめす刈る人もなしといふを本哥として此森乃
下草かるゝかと今もそてをやされすといへるはおいぬる年よりの述懐
なるへし

たなばたは空にしるらん
順集云西宮源大納言ノ
大饗日たまはるゝに
四尺屏風あたらしく調(テウ)
せられけるその歌とて
さゝかにのはいとかくに
くもといはん枕詞に
よめり荊楚歳時記云七夕陳瓜菓庭中以乞巧有嬉子網瓜上則以為得巧
とあれはなそらへて
さゝかにとそへたるや
七夕のあかぬ別も

拾遺和歌集巻第十七

雑秋

屏風に七月七日

源したかふ

たなばたは空にしるらんさゝかにの
いとかくはかりまつるこゝろを

円融院御屏風に七夕まつり
したる所にまらうとのきたるをとゝめ
たり　平兼盛

七夕のあかぬわかれもゆゝしきを

七夕乃年ふ一夜逢
てあかぬ別をする留
かきりなし君を
いそきつんとこの
雞のうたふに立
男をかくよする也
あさ戸あけて詠め
来年まてハえある
ゆふき別の文を恋
て七夕の詠人をさ
鶏居明て手を風情
ある白さうや
わたしもりや舟かせ
舟の世ハ別をいうて

久しとおもの君かきさゆせる
七夕様鏡よ立律よりうとよ
はうかうる　涼しゆき
あさ戸あけて詠めやすん七夕乃
あかねわかれ乃うしをこひ流く
題しらす　ひとまろ
わたしもりや舟かせ一よせよ（よせよイ）
かくひきゆすきみかあるらん
七夕まつりける涼扇よかゝせ
給へる　天暦御製

早く舟をかくして河
瀬をさかしけよのき
ハ舟を世ハ年逢瀬を恋
くるる也
しまりてれうしやまき
星乃逢瀬のうき雲
志きまよと哉えかハ
天河よ我ハ松ち立
滴んをもちて七帝
ハ常ハおりうさせ来
事ありけきハし
世をうみてわか仰を糸ハ
世よ侍さる人七夕は
うみくかす糸られ
ハ星も涙の玉乃緒

しまりくさ乃うしやまきすまてかの河
こよひたちハおりやくさよし
題しらす　読人志らす
世をうみくわかかす糸ハ七夕乃
あふさ乃玉れをよやあるらん
天禄四年五月廿一日圓融院の
みかと一品宮（資子内親王）よ渡らせおはしてらんご（乱碁）
うたせ給ひけるまけわさを七月
七日うかの宮（一品宮）よりうちれ太えん
あうちまき事かゝる扇よかられ

まやはらぬくらん
さるへし
あまのかはゝへ涼しき
心明したなはたに
とりはしあふきや
さうあふきの涼しさを
はたなはたの風をや
かさんとなり
あまの川あふきの風
同時の霧はるへし
そらすみわたるハ爲
鵲の橋の餘情あし
淮南子ニ云ク烏鵲塡テ河ニ
成テ橋ヲ度ス織女ヲと
まかりてかさゝきの橋と

て侍るうすぬまやわはりて
侍りける　中務
あまのかはかはへすゝしきたなはたに
あふきのかせをなほやかさまし
元輔
あまの川あふきの風に霧はれて
そらすみわたるかさゝきの橋
おなし御時屏風に七月七日
夜琴ひく女ある所
源したかふ

ことのねはなそや
ひきしとめねはかひなし
ハ御事しかぬ別を
ひきとめねはかひなし
事なりひきとめぬよし
とめぬなりやとの心
水乃あやをおりたちて
波の文を綾によそへて
たかりさしくまふんと
心詞もぬぎちらし
て衣をほすかす夜
いもの綾をまんと
ことのかする女の心
秋風よことつてよたなはたつめ
春毎に衣て秋風

ことのねはなそやかひなき七夕の
あかぬわかれをひきしとめねは
仁和御（時イ）屏風に七月七日女の川に
あみたる所　平定文
水のあやをおりたちてきんぬきちらし
たなはたつめに衣かす夜は
七月七日によみ侍りける
藤原義孝（右近少将　春宮権亮）
秋風よたなはたつめにことゝはん
いかなるよゝのおもんとすらん

侍る星合の空を
うち詠めていひける
世にかゝる身をもて
夕に向ひんとしつき
なれ乃果をさてる心
あるべし

寂照(ジヤクセウ)がもろこしに

寂照ハ大江定基が法名
也参議斉光(ナリミツ)の子也三河
守にてありせり妻(メ)子(コ)をはなれて
秋さりに出家して恵心僧
都の弟子となれり長保
二年に恵心天台宗の問
まいらせ廿七ケ条

寂照がもろこしにまかりける
とし七月七日舟にのり侍る
にいひつかはしける　右衛門督公任

あまの河のちのけふだにはるけきを
いつともしらぬふなでかなしも

七夕ハ契りそはねるとしあれと
寄よみくとこせて待る
に　はるゆき
あひみずてひと月も君をまつかね

しるへさよわも　わたつうみかさねる
詠まてす　よみひとしらずて
むつましきいもせ乃山とたのまれや
天河秋まちのそらへてうらん

後まて寂照にこと
付て入宋(ソウ)せし南湖(ナンコ)
乃知礼法師に向てり
寂照を知礼乃答釈
をもて帰朝せんとせ
しに丞相丁晋公(テイシンコウ)
切にとめて呉門寺に止む彼答釈ハ弟徒に傳へしむ元亨釈書妻
あまの川のちのちぎるに　星ハ別くも又来年ハあふりされとこれ
子一年さうるかのちの流ハ絶まずなるけれども寂照が入宋乃
舟出ハ再会いつともさだまらねハかなしきとし
あひみずてひと月もあひみずてこし年ハ新撰集に君を待つゝ
ひと日二日に成ぬれハけさ彦星乃宿すなとなる歌れあらまし
七夕ハ待の逢瀬りありひされハよしひかつとも
我ハ君にあひみてあるされハ一日へさてし堪るまさの心そや
むつましきいもせのひと　是ハ深き中となりなんとする考かと

み侍さくるやや
心ハあきらかし
ともしかやく燎にあるを
心ハ明らかし
此やく名乃小田にて
舟(?)ろ乃わきて雲と
はつすまきらく侍
屏風にて鹿也堀(?)ゝにや
ゆゑ乃きまゝに富(?)てる
浪ハよそゝる物流
そおもひくらんとよ
あふ歌にて案
もく浪ハ雲け
つくものゝし

天暦御屏風に
をしかやく燎にあかす　すまれ無きそ
秋ゆきかねもわかなやあるらん

三条太政大臣家にて哥人めし（道兼公粟田関白）
あつめて侍りし乃題よませ侍り
くるまきし乃ほとりの花と
いふことを　　源重之
ゆく水乃きしに匂へるをみなへし
しのひに浪やおもひかくらん

唐乃前栽見よ女ともの侍りて

こゝにしも何ゝほふらん
此哥もはゝり女乃
はゝかん物いひさか
なき世に法師乃名
をやたゝんとのさ
とふかきこゝろ也
秋の野の花のいろ
えすてくハえつね
うつてとの心なる
つし歌に深きあり
さやうや
舟景乃野中に
わくさぬハ見悠ぬ
人ハおもしと思

さかのにて　　僧正遍昭
こゝにしも何ゝほふらんをみなへし
人乃ものいひさかにくき世に

たいしらす　　よみ人しらす
秋の野の花のいろ〱とりすへて
わかころもてにうつしてしかね
舟景乃野なかにたてるをみなへし
わくさぬ人もあらしとそ思ふ

圓融院乃御屏風に秋の野に
いろ〱乃花さきみたれたる

とあこは頭よ似て
そうし前と同じ
こゝはとふあまきの花
露をすへしとハ粉こ
菩提をうれますに
ねをとゝもミゆきに
え所りさまとし
とぞやまそみねの峯も
みねろあくき
峯に立鳴るの心
いづく世にも物
るし古今に入奇也
こゝみゝみらる歌
花の浦の初くハ来
見といふ事似たるとぞ

ありますへきる人あ里
平兼盛
こゝはとふあまきの花もかほるへきよ
ねをもさそはすゝくるゝや
あはぬしとゆふこひとをくの
かうふかさそて　偲ゆき
とふやまみねしのふる鹿の
へよ（けん）うる秋をしる人かなき
さいつけそ
こゝみすもかへる物のうち花とき

無き人は見せて来
まといふ物かきし
古今にこゝは似ぬり
まことすもゆるまとよ
める歌なし
かつみかうくる
春過し後も文来
これそ付て帰妃妾
執ハやそちきを云
とりてむへ人をとそう
むハむとふ心
善滋為政　お能中与保
章子　文章博士　四位
このへのうちにあかき
宮殿の内さへ明る月
秋の荒たる宿のすきま

無き人り見えすへりくり
よしのふ
かつみつゝかつてあるむ人を
うき世の中をそむきかねつゝ
中宮乃内におはしける時
月のあかき夜弄よ侍るよ
善滋（ヨシシゲ）為政
こゝのへ乃内にあかき月影に（おもひやるかな）
あれたるやとをおもひこそやれ
延喜十九年九月十三日清屏風

かゝる家乃れわき
なかいやまさく
月をのみて燕子楼
燕子楼 李周翰が注に眞
ミゝ月の与よ事し
てみの流を燕子
さしきの物かやさう
秋半ゑをあくる時月
にみ流れをこれハ海
上八十歳のさ宗を緑
やうやらすまさく
八月よ人乃家氏
順集に源大納言大
饗日の四尺屏風乃
絵のあいさあく

よ月をのみて燕子楼に
（形恒集に云 奇羽かゝらぬてあり）
よみ人しらず
さひしさ乃おかみやまりやすさゑと
みるこちする秋乃よ氏月
八月よ人乃家氏はかよのきま（納言すゝる也）
ちうとあまさあまて月をみる
よてうふ
ま乃おもにやどれる月乃のとけきハ
まみあく人乃ね氏まれたる
清慎公五十賀屏風なり

そのわもにやどれる
蓬居を波のさて
居ちまうでに月
の閑かるハ身かく
みるねされて思ふと
ちうゆのわにぬとる
恵井ハ蓬候の事に出
りのこゑハ人宮
廢毛でうてに開哉
りける乃恵井の鏡
そのけを知やと
虫なかぬ人もとはせぬ
庭の草も虫も来てあそ
てまし人を恨むや
庭草にむらあつて

さとすけ
そうてやれいとさらうやあふさの
せきひきこゆる山のけ乃なる
題しらず　曾祢好忠
虫なかぬ人もとはせぬわかやとは
秋乃野へとくきみハまくなり
人丸
庭草にむら雨ふりてひくらしの
なく声きけハ秋はきにけり
三百六十首乃中なり

蒼茫の天に日晩ゆる
て物さびしき気色
に秋の感情を催す
ころなるべし
秋風ハ吹きやすみなる
蝉の鳴のきこえ家
のあはれをせめて隠
ともまたしきたる乃
寂寞たる秋風の声
腸断堪心とも也
すみの江の松を秋風
鐘情ありと張句ひ
古今和歌部の歌に
秋かぜのさむくふくなる
秋情の二続同断

よしこて

秋風ハふきまきやかりかやのよの
何しかくるとみすゝきを

右大将定国家の屏風に
み津ね

すみの江の松を秋風ふくからに
こゑうちそふるおきつしら波

貫之とも　ひとまろ

秋かぜのさむくふくなる我宿の
あさちかもとに日くらしもなく

あきさむし日くらし
をとはふるれ宿なり
無量の寂莫をもつく
みゆく時なりや
秋かぜし日ごとにふけハ
し八雨定秋初風吹
てより日ごとに秋深く
なれハ宿花暮乃きを
も閑ゑ行しとも
あさま流るゝひく
心ハ涸なるべし今
やたるんとといや
心ぼそめしてみえまね
野への錦情深き
也趣なるべし

秋かせし日ことにふけハまろやとれ
そ乃みゝいろつきぬらん
あきはれさまひくその萩の花
いまやちるらんいまさかりに

（男くの儀へける女の方へ事よろし方遣と八天一弥）
ちるらむちる雨によりてくれは
（きゝて方へゆかれ出りたる方へゆきて）
わかれてやかれりときてある
（方をよみて歌の玉ゆくし）
紀むりこゝろかれて見きくらよ
（みつね又の安新をとしきて）
歌よむ人すりきてされ
うちよりんさゐいてよくみん
こゝろへともはもこゝろかし

いも宿しあかねハ
さしてきるも心なりけ
て覚る宵をもたぬね
まつれハよの中し
すゝきもいそね
この男ハ所をまよふ
ても見えよやさかりし
秋はきの花さかりに
萩の下葉の色みゆる
つけてよその人の袂
近く情あるをき
目にちかくみえても
世の中の人の心をそめし
萩の下葉に付て心を
みえしとおもしめしそ

あくねハふくをおもしすゝきら（女きえの心也）
てもいそねおりかれもすきころ
そんとおもひそれハ萩乃葉にも
みちさるにつけて哥をよみをこ
せける

女

秋はきの下葉につけてめに近く
よそなる人乃こゝろをそみる

返し　　　はしゆき

世乃中ハ人乃心をそめしかと
草葉にいろも見えしとそ思ふ

さるによめりし世中の
人の心を染られ
草葉の色にハ見ゆ
ましハおもふらし
このころ乃あかつき露
あかつき乃露と霧
夜露にて羽の
こゝひし哥の心ハ同し
秋をさむみ衣かりかね
秋霜にならふるをハ
けて露そてなく
さる此萩の色を付お
それのさかりといひやせ
かの見ゆる池辺に
撫案おもふに萬葉二かのさとはかつて緑おほく見ゆるかの村ちかくには

題しらす　　ひとまろ

このころのあかつき露に我やとの
萩乃下葉ハいろつきにけり

秋をさむみ衣かりかねなくなへに
萩乃下葉ハうつろひにけり

よみ人しらす

かの見ゆる池邊にたてるそかきくの
しけみさえた乃いろ乃てこらさ

かのきく　承和菊　黄菊なとの説定家卿用ひたまふ

見ゆるうちに来て生すひとるをとうつとはゐの見ゆるとぞいふよ
池乃辺ひとむらに咲かするすみひ菊れ色のうつりて見ゆるとは
ちりにまきこゆる也

天暦御時菊乃えん侍りけるに
よまれける　忠見

わかせりちる秋のハ菊乃花
雨ぬれども いろを見えくまし
植ゑて侍る男をあれて（侍り）
のちに菊のうつろひて侍るを
とつかハすとて　よみ人しらず
そら世りうきことときくね菊かも

わかせよちる秋ハ
菊ハ風りちる菊也
風に散る菊ハ
秋下をり雨の菊
をみるはきとをるに
お乃菊の菊をうつ手
おもくゆるを也
きよ世ようきことれいね
菊ハ草中仙その花

うつろふハいろもおもはぬと見ゆる（よりけ）
野辺もえも　ひとまろ

わきもこがころもぬれて下田を
かりもとく おさめんとす乃かる田
屏風乃ゑおきさおの稲かるところ
書て侍る所　忠見

秋くれかぜほるいねハ手つれど
おもひくる身をきさところちるき
延喜御時月次御屏風のうた
みつね

せぬ物れハいそも世に
うきこすきうね菊と
よみわれハふかう
つらふるハおれハまて
さみく嫉妬のうき迫
の中ハいつも悲しき
わきもこがゐも物と
金字浜をおさめ刈く
納めん金とうつして
おもしハ赤党
秋ころかへつる稲
あ年そかへつる稲ハ
かきりなしといふて
そく不ありをたすハ
しきころ待ちきる

秋まてかりと山田の庵を
千くさ稲を借庵り
せめて賤男かまもり
とそ
きく人に秋のあきよ
唐崎辛崎の七瀬乃
禊也
をくら山によりてくるゝハ
心ハあきらかに紅葉紅
葉乃時節に嵐て
舟木も今はそひよ
れなるへし
都の月のさやけき
さやけき月よもみちの
浅深をもわかつ也

かりそめにかりと山田のいほをはりまもらく
まもるかひもいかりてしよへれらん
きく人も秋のしらきにゆうかほそ
舟のうちわかるゝを見ゆく

恵慶法師

をくら山もみちはのへふきさこく
舟木もやまいかけちるらくよし
さいきつゝとよみ舎きつゝを
みやこ乃月をさやけみもみち乃
こきもうすさをわきいつるかり

月の清光もみちの
葉紅なるにてりそふを
る心なるへし
行幸もありぬへき
延喜乃行幸もあるへく
御覧すへきよしの思
と亭子院の勅にて
をくら山みねのもみち
亭子院御幸いまに
あるをそのみゆきま
行幸をまちなむと
もみち葉に対して云
院のは御幸天子の行幸
いつれもみゆきとよむ也
ふるさとにゆきとそ

亭子院大井河に御幸ありて行幸
もありぬへき所なりとおほせ給ふに
（延喜乃御門へそのよしそうせんとて）
ことのよしそうせんと申して

小一条太政大臣　貞信公

をくらやまみねのもみちは心あらは
いまひとたひのみゆきまたなん
よひ人乃もみち葉とゆくらうか
屏風に　大中臣能宣
みるまゝにかつ見えぬるや龍田姫
もみち乃みきそめすらん

此旅人を越て行るを
見て紅葉錦を着
非のさけまとひ朱
賣ると紅葉乃錦
しら波ハ盗人とされや
盗錦ハ浪のうへし
錦をきて古郷へ
かへる古事と同
紅葉乃なかるゝ時ハ
竹河河内國の名
所也紅葉よえかゝる
とし竹河乃緑の
錦濃もあるへし
其國の此ゝ國の
紅葉の深浅ハ不可極

たいしらす　よミ人しらす

しら波ハふるさとなれやもみちはの
にしきをきつゝたちかへるらん

みつね

紅葉乃なかるゝ時ハ竹河乃
ふち乃ミとりもいろかはるらん

亭子院御屏風に

ゐ乃おし代みてゐさしもとゆふ
紅葉のいろやうちせあるらん

内裏御屏風に　清原元輔

網代によるらんと云り
月かけのさやかにてよ
田上ハ近江ノ宇治の
川上なり氷魚の名也
網代ハ氷魚乃かりと云
みえて月の清されハ数
もかそへゆるなり
氷魚使　宇治田上ニよ
ひをまうせるの使立
あるへし　太郎綱ニ
いかてなをあしろのひをニ
此人ハ何すきかへて我
を問ねと問さりし
氷魚のよる網
さふかこゝハいさふやの

月かけ乃たなかミ川にきよけれハ
あしろにひをのよるも見えけり

修理　内近允若夫女

いかてなをあしろ乃ひをにこととハん
なにゝよりてか我をとハぬと

題しらす　よミ人しらす

さふかこゝハいさふやる乃まみちも

須達ハ祇峯といひしめ
て世をいとめんと思之祇
子かいふ社の志めなりこ
えらく該嫁よ紅葉のち
まいせんとさきやし時
常紅れハ第ん宙きさ心
をよめるなるへし
いかれハ千ちのちいきる
秋の果を飽果より
いひけて紅葉も来
あひすいんや秋もある
さるよあきを果るとえ
いかれはと
紅葉もまさとそくも行ね
秋ハ行とも去く
もみぢ又立帰れと

志めをハこゝくちるもいふものを

（順集ニハ康保二年女五宮八誕御屏風の哥とあり）
九月晦日乃日男女野ゟ栖ひて紅
葉を見る　　源順

いかなれハ千ちのはしを行かたに
秋をてねらんとふをいふらん

十月朔日のひ殿上のをのこゝも嵯峨野ゟまかりて侍るともよ
とれく　　清原元輔

紅葉しまさらそくもなりぬはいて秋
よらのをときもはけりやまし

告やうまりきいそ
いひやんとし十月一日
それハ去ても行ぬとし
あまむかし嫌ゟ
松人乃きる煙のから
居宅しやのて打時雨
まされハ時雨を下すも
さまりとよめ十月
時雨の比の景気さるも
とおわけよ見て侍るや
名をきけハむかしのの
此哥秋の都ゟ行も
おやの喪さるあひて
喪すあひし法師
よくし

志ぐれを　　よのふ

かみやまりハ河ゟかゝら嵐ゟ月
時雨をそくときとさかりられ

十月志賀乃山こえしける人ゝ
源忠ふ

名をきけハむかしなから乃山なれと
志ぐるゝころハいろかわりけり

みおや乃さうにあひて侍る
法師乃もとへつかはしける
こ津ね

被係乃綱の可由る
ことさま袖の紅の涙
まぎれハ紅涙を袖
とそやらんとて
志くれつゝふりにし宿の
言ハ宿のことハ鏡
乃歌の事をまとめて
其下の哥こともなく
しる集るといふと
昔は作りする意
と本歌の意を築る
まるてしよめり
むかしより名高き
本歌をこのもとに
ろてし此うよめる
てハ落とゆるとハ

とミちやまとやまとおもふらん弥生月
志るくこゝろいろのまされハ

天暦御時伊勢か家乃集めしければ
かゝらすとて　中務

志くれつゝふりにしやとのことの葉ハ
かきあつむれととまらさりけり

御返し　天暦御製

むかしより名高きやとのことのはゝ
このもとにこそおちつもるてへ

権中納言義懐入道してのちむすめ

又とし心の侍るも
名ちるさき有すし物
をおぼしわするゝなといふ
親様なりし
中納言義懐（ヨシチカ）入道
義懐ハ謙徳公の三
男正二位中納言ノ卿
寛和二年六月廿二日花
山院落飾の日従
ま家して飯室に住給
やまをのうちにかくれたる
頃係の気持などひと
けて姉のこひねるを
かろやかなるとなる
ミやま木をあさなゆふな

乃女院よりやしなひたまひけるを
おほんひとり乃院より侍りけるおもひ乃
（義懐の娘の花山院の女御にて侍りしが姫君をうみて）
ことゝり十月斗の空にありける
やまかつ乃かきねにかれゆるなてしこを
志のはれてすまふ人もなし

三百六十首の中より
曾祢好忠

みやま木を朝なゆふなにこりつめて
さむさをこふるをのゝすみやき

わかるれこゝろの世をまとはれて

郭久保本をうけて
炭に焼て世の中をわ
らんと賣人あり
さともわるとて
それをのおりの世をさかに
昭のおりにせられて右
薬をえられんと
かれやハ離乃学も
ひさしくておかりし
心ハ明し
まへり乃使ひり
に詞云ふ富祭に
卯月也こるハ恩
恩楽女蔵人左近集
此哥の師云ふ源

しま藻乃やとゝとかれやしなわらん
司馬相如か家にたつ乃よも月
おもしろう侍る哉ゆかしきて
こともすけ
いさゝかてやわ侍りしてんそ乃月
まの乃さやりもとをしさかなわ
まへり乃使ひりまうり出る今の
ことからすかそゆるよつをうし
かるをそうしとせめまゐれハ
東宮女蔵人左近

宰相中将俄に小忌
にあたりてこまを摺
と云ものをきせられ
て山藍をそめたるは
あゐ乃はしすれたとこ
小忌乃召れてと新
嘗会なとのわさに
かうしきし此集のま
つかの使もこそりや
ねきわらくとことに花
とくと思きハすれと
とりまおの解るを
さてか山井ハ青摺をする山藍をもえて思ふとすれと涙る心を含
さすかわれる人小忌乃召てと同し十一月中の卯日新嘗会にわた
みる辰日豊明節会に山藍にてすれる小忌と云物をきるなるを

かゝりあくとゝとハすれとおり乃
山のあゐをそなをすこしわれる
をそりかりかゝる人乃とまは
まうわかれハ女とも盃にひけ
ろてとしうしかれハ
よしのふ
のゝ
あかはけ乃心ちとろすれさるつきまは
ひけもうひとくいそねてこそ

とこのえまでと枕草子に云へり江次第ニ小忌王(ヲミノヲウ)ハ小忌大夫(ヲミノタイフ)なとゝ云て其兄
也源氏物語にも舞人か袖とも云ふ事見ゆ摺衣ハ染給ひて錦二
月けるて日陰(ヒカゲ)乃かつら一条禅閣御説ニ是ハ蘿と云草を日かけといふ
又神代より此草を用ゐて来れり日本紀にも見えてかつらにしたると有
やさしむかしハすなはち蘿を用ゆる也中古より白き糸を用ゆるなと
ある時ハ日乃かけとなりひかけを月にかけたるハ月気乃冴たる乃
心にもまさし月乃初日出るまでのところを有明と云へし
臨時祭　十一月下酉日
寛平の御宇に始し也
月二試楽(シガク)調楽(テウガク)なとあるを
当日此使江次第ニ委
此日も舞人なとも摺
衣きるなれハ
あしひき乃山あゐにすれる
山あゐにすれるハ山藍

右大臣恒佐(カ)家屏風に臨時祭出
かける所に　つらゆき
あしひき乃山あゐにすれるころもをハ
神につかふるしるしとそおもふ
[illegible]しらも　よみ人しらす

すれる是摺也神事ニすの花乃服のゝさらしれも
神につかふる志るしと云
ちはやふる神のいかきに雪ふりて
雪を木綿に見なせり
ひとかねいてるきぬさ
榊葉の散りしと雪
乃降てつもれるを云
古への女乃独ね心を
おもふのゝあるへし
わさは子し雪けのえへハ
わかうハ溺し雪ハ
雪消し雪浪こゝく
あかりて降くハ隠れ
なりとし雪の頃

ちはやふる神乃いかきに雪ふりて
そらよりかゝるゆふにそありける
つらゆき
ひとかねいてるきぬさこらうや
榊葉にしも雪乃ふるらん
中務のみこ　具平　村上皇子
雪を志陸(鳴らし)くのうてはらふて
見はてけ(けふ)りやうくまし待これハ
わさは子し雪け乃えへはすなれ
をちの志かくえしとなりゆく

侍るとかくよろこひ也
ことゆひよふりし雪
老乃白髪へとよそへ
心乃雪ハ霜のすりハ
をも悲し心洞乃台
ちて枕の下に鳴也
ところ鐘にて寝てう
さわらひやしたにもゆ
わらひを火によせて
萌らんと然るより
春めきけれハ蕨も
べうり野火の学ま
霜かれの下よりもゆ
下よりもゆんとも
霜かれよ見てさし梅ハ
冬木の梅ハ花なり

ことゆひよふりし雪のしつくハ
まくら乃きこゆるまて立ぬる

東宮乃唐屏風よ春野やく
ところ　藤原義親（加賀守従五位下　寺社雑掌）

さわらひやしたにもゆらん霜かれ乃
野はら乃けふり春めきにけり

志もとれはこゝち比りけめら
へたおけまて　はるゆき

霜かれよ見てし梅ハさきまさりけり
春りハわか身あらんとすや

しめきうつりき侍れ
我身ハ時よおかすう
おるやせんと頼む心
をおりへはするや
いるやとよめり
梅乃ちる匂ひのかく
春れ近きゆへ梅く
もつきをいそく紀
氏の誰の梅られを
匂ひもつきをおひ
衲をうる心
うめハ千家もちりとそ
梅さく春もうつしとそ
しめくよ我身を
河時おかりんとも

あさるともをりすくなりちる
とまらりはかへらさまさりひ
をとこせ侍く　三統元夏（ミムネ）　式部大輔従五位上　東宮学士

梅乃ちる匂ひ乃かくれつるを
ちるとよりのちらさまかりけり

無し　清ゆき

うめハ千家もちりとてさく梅を
まれをまきもおさ我やおもひちる
さしもと乃はなとかくしつり
さし乃をとめをよるかなきさ
て

年てあつまりぬれは
ときはの松も霜みる
そのかみ
むかしなれわか黒髪に年くれて
かゝみ乃うちにふれるしら雪

むかしなれわか黒髪は
わかゝりしに年くれてとしひく下に白髪の老とてゐ頭ひかりく
侍るや祖先今猶名に聞ゆや門むかしおもはゝわかえやかへらん
とまておもひし下つまく乃さかき黒髪にくれなくても　撰者
かやう乃さとひあやまちはべりし